

今日の日課は、人々が誤りに陥る様を教えている。聖書によく出てくるのだが、それらは私たちの前に掲げられている鏡なのだ。聞いたと思うが、サムエル記上には、イスラエルの長老たちが、予言者サムエルの所にやって来て、他の国にみられる王の樹立を求めた。その時代、イスラエルは3つのグループ、士師（裁判官）、聖職者、予言者によって国が統治されていた。士師は法律事柄と問題解決を取り扱い、聖職者は国の信仰と捧げる命にかかわり、予言者は人々の品行と道徳の健全さの守護者であった。平易に説明するなら、この制度は重要であり、よく機能していた。他の国の王たちの支配とは違っていた。聞いたと思うが、サムエルは、王を樹立させることの意味を人々に警告した。どんな政府を樹立するにも代価が考慮に入るのでためらいがあるが、それ以上であった。すべてが組織化され、すべてに貢献できる全体的な王制機関として設立されようとした。しかし、よい提案ではないとサムエルは警告した。それにもかかわらず、反抗期のティーンエイジャーのように、人々（特に長老）は聞かなかった。

その後どうなったかは、サムエル記上と記下、列王記上と記下で読むことができる。最初の王はサウルで、それは悲惨であったと描かれている。そしてダビデ王が現れる。ダビデは、イスラエルの理想的な王の姿であったと一般的に描写されている。エッサイ（ダビデ王の父）が、2人の息子をサムエルの前に連れて行った事を思い起こす。しかし、どちらも未来の王として認められず、そのあとサムエルは、エッサイに他に息子がいるかと尋ねた。ダビデがいたのだが、まだ少年で羊の世話をしていた。もちろん、ゴリアテ（大男のペニシテ人の戦士）を征伐したダビデの物語を思い出す。しかしダビデの描写はまったく明瞭ではない。戦闘勝利と国の統率にもかかわらず、大きな欠陥のある人物で、彼の人生は道徳的欠落と悲劇で損なわれていた。最も偉大な王たちと比べても、王としての姿は疑わしかった。

もちろん、サムエル記上筆者の視野のみからの考察であるが、その時代の政治的現実、それほど明瞭ではなかったことに間違いはない。特にあと知恵なしでも、おそらくは本日の日課で指摘されている以上に王制の利点はあったであろう。

それでもやはり、私を引きつける点は、少なくともサムエル記筆者の視点から、人々（とりわけ長老たち）は、他国は王を樹立していたので、この国も王を求めた。それは人間の群衆心理構造のようであり、決断は人々の行動と発言を基本としていた。それは深い悲しみと悲嘆、危険さと惨事へと導く。その精神構造は悲劇へと導く。それは人々（特に指導者）が誤りに陥る姿であり、私たち自身を反射する鏡である。何が、誰が、私たちの信念や品行に影響を与えるのだろうか？

*決断は人々の言動（感情）によって左右されてはいけない。冷静な分析が必要である。

本日のマルコ福音書 (3:20-35)も、人々が誤りに落ちてゆく姿を私たちに示している。マルコ伝に最初の章の中に、イエスが群衆に囲まれている。イエスが行く先々で、群衆はイエスに引き寄せられた。なぜなら“不浄な霊”すなわち悪霊からの癒しと救済の業をなされたからであり、しるし(奇跡)と驚きを与えられたからである。

多くの人々がやって来たので、彼らは食事をする暇もなかった。

人々は「あの男は気が変になっている」と言っていた。

イエスは人々のために働かれていたのに、一体、何を言っているのか？

家族さえも、母、兄弟、姉妹はイエスを連れ戻しに来た。しかし家族が到着する前に、問題の核心は宗教指導者、律法学者、聖職者によってあらわにされていた。

彼らは何が起きているかを見るために、遠くエルサレムから来ていたのだ。

「そうだ！ イエスはベルゼレブ(悪霊あるいは悪魔の名前)に取り付かれている。悪霊の頭の力によって悪霊を追い出している」と彼らは言った。ある程度は論理的であった。しかしイエスは忍耐強く、彼らの論理は間違いであり、どうして悪魔が悪魔を追い出すのかと説明された。(イエスが入られた)家の中は意見が分かれ、もう限界であった。

しかしそれは誤った論理だけではなく、霊的な危険性があった。

なぜなら人が犯す罪は赦され、神を汚す言葉を吐いても赦され(神の哀れみは無限である)ののだが、聖霊を汚す者は決して赦されず、とこしえの罪に定められる。

これは聖者を困惑させる謎であり、長い時代に渡って悩まされている。

もし神の愛と哀れみが無限であるなら、どうして赦されない罪があるのか？

とこしえの罪。私が考え付く唯一の解釈は、その中に、それ自身に、赦しの可能性を妨害する何かが存在しているに違いない。

例えば、赦しの受け入れ拒否は、神の愛の受け入れを拒否することである。

赦しの受け入れ拒否は、赦しの必要性の認識を拒否するという意味だ。

イエスは“不浄な霊”に取り付かれていると人々が憶測して話す危険性を知っておられた。

言葉を言い換えると、これは(不浄な霊は)イエス御自身とは逆である。

それは善がなにであるかを知り、それを認めるのを拒否することである。

さらに悪い事には、善は実際の悪霊の力であると言っていることだ。

それは単なる誤りではなく、重大な誤り(他の人々が王を立てているから、我々も望む)

でさえない。それは故意の誤りである。それは意志が実行しているのである。

善を見るのも言うのも悪霊が関わっている。それは鏡である。

鏡は、私たち自身を吟味してその違いを教えてくれる。

聖霊に対する危険性を考えると、赦さないという罪は、善を知る事と認める事の故意の拒否である。悪霊が関わっているなら、逆の方法で行えないかと思っている。

それは自分の意志によって悪霊の認識を拒否するのだ。

悪霊を見て見ぬふりをするさなかに私たちは存在している。

私たちの快適な人生を送らせる好都合さ（困難さや問題からの自由）によって、あまり多くの混乱もなく進んでゆく。

*困難さや問題から目をそらす人生を送ってはいけない。

今週、先住民の子供たち215人の死体が発見されたニュースを聞いて衝撃を受けた。

その子供たちは、キャンプスにあった先住民寄宿学校(residential school)の跡地に埋められていた。衝撃の発見であるが、驚くものではない。

悲しくも、痛ましくも、生存者からはこのような墓の存在が聞かされていた。

苦痛とおぞましさの発見がこれからもあるだろう。私は言うべき言葉が見つからない。

どのようにして私たち人間が、このような誤りに陥ったのかと私は自問している。

何度も何度も繰り返している。

先住民寄宿学校のような組織は、どのようにして設立され運営されたのか、

教会の人々によって！ 虐待と残酷さをもって、すべては故意による集団虐殺である。

家族から子供がみんな引き離され、懲罰、打撲、喪失、人生の強奪、それだけではない。

明白な悪にもかかわらず、見たところ、私たちと同じ人々は問題ないと思ったのだ。

彼らは何を考えていたのだ？ そして今だ誤りに陥っている私たちはどこにいるのだ？

善を見ることを故意に否定している私たちはどこにいるのだ？

悪を故意（もし自分を欺き、意図しないなら）に喜んで迎える私たちはどこにいるのだ？

イエスを囲んで座る群衆がいた。イエスの母と兄弟、姉妹がやって来て、外からイエスを呼んでいると告げられた。そして、自分の回りに座っている人たちを見回して言われた。

『わたしの母と兄弟です。神のみこころを行う人はだれでも、わたしの兄弟、姉妹です』

これはおそらく、私たちにも差し向けられた、前進する道を探す招待である。

神の御心を求める招待であり、それは私たちの間に存在する善の探求と認識のためだ。

そして悪霊は何であるかを認識するのだ。

(文責長澤猛)